事例 15

原学級でも自分らしさを

～原学級とのかかわりを深めながら～

自分の思いを話すことができるようになってきたアユミさん。
特別支援学級担任のマツヤマ先生は，原学級の子どもたちにアユミさんのことをもっと知ってもらい，アユミさんが原学級でも自分らしく活動できるようになってほしいと願っています。
どのように原学級と連携していけばよいでしょうか。

●アユミさんが自分らしく活動することを願って

小学校に入学したころ，１年生の教室の隅にうずくまっていることが多かったアユミさん。４月の終わりに特別支援学級に入級しましたが，自分から話すことはほとんどありませんでした。

特別支援学級担任のマツヤマ先生は,「アユミさんが自分の思いを話すことで，自分らしく活動し，楽しいことをたくさん経験できるのではないか」と考えました。そして，アユミさんが興味関心をもっている学習を通して，声を出したり話したりできるよう支援を続けました。また，行事の時には，アユミさんと一緒に原学級の活動に参加するようにしました。

３年生になり，アユミさんは特別支援学級の中では自分の思いを話せるようになり，自分らしさを出して伸び伸びと活動できるようになってきました。マツヤマ先生は，アユミさんが原学級とのかかわりを少しずつ増やし，原学級担任や子どもたちにも自分の思いを話せるようになってほしいと願いました。

●原学級の様子を知ろう

アユミさんと原学級のかかわりを増やすにはどうしたらよいか考え始めた時，マツヤマ先生は自分自身が原学級とのかかわりが少なく，原学級の活動についてほとんど知らないことに気づきました。

そこで，原学級の様子を知るための方法を考え，実践しました。

「こんなことができそうです」
- 原学級の時間割や週予定をもらおう。
- 原学級と特別支援学級の学級通信を互いにやりとりしよう。
- 原学級の担任と直接話をできない時もあるから，連絡帳を作ってアユミさんの様子を知らせたり，原学級の情報をもらったりしよう。
- 学年会にも積極的に参加しよう。
- 可能なときは，アユミさんと一緒に原学級の授業に参加しよう。

そして，得た情報を基に，アユミさんが参加しやすい活動を考えてみました。

●原学級担任や子どもたちと仲良くなろう

○特別支援学級で
・原学級の子ども４，５人に特別支援学級に来てもらい，アユミさんと話しながら給食を食べる。
・おやつ作りをした時，出来上がったおやつを原学級に届ける。
○原学級で
・原学級の授業にＳＴ（サブティチャー）としてマツヤマ先生が加わり，原学級の子どもたちとアユミさんが一緒に活動できるよう支援する。
・グループ学習では，アユミさんが話しやすい子どもたちとグループになるようにする。

うれしかった原学級担任の協力（マツヤマ先生の話）

特別支援学級で作ったクッキーを，アユミさんと一緒に原学級に届けました。

原学級の担任は，授業中にもかかわらず，アユミさんから子どもたち一人一人にクッキーを手渡す機会を作ってくれました。

教室の入口で帰るつもりだったので，原学級の担任が，アユミさんを大事に受け入れ，位置づけてくれたことをとてもうれしく思いました。

原学級担任や子どもたちとかかわる場をつくったことによって，アユミさんもマツヤマ先生と一緒なら，原学級担任や子どもたちと少しずつ話せるようになってきました。また，原学級の子どもたちが特別支援学級に来ることも多くなり，マツヤマ先生とも仲良くなることができました。このことは，アユミさんが原学級の子どもたちに対して安心感をもつことにつながりました。

● 原学級の子どもたちとのかかわりを更に増やそう

アユミさんが原学級担任や子どもたちと話せるようになってきたので，マツヤマ先生は原学級の子どもたちと更に多くのかかわりがもてそうな「秋祭にお店を出そう」の単元を秋祭（学校祭）に合わせて設定し，学習するようにしました。

【単元におけるアユミさんへの願い】

＊このようなアユミさんに
小集団の中で，自分の思いを伝えたり，自分らしさを出したりできるようになったアユミさんに

→

＊このような支援で
自分で考えたゲームのお店を出し，原学級の子どもたちにゲームのやり方などを説明する場を設け，支援することにより

→

＊このような姿になるだろう
ゲームのやり方の説明，声援など，原学級の子どもたちと楽しくやりとりすることができる

この学習を通して，原学級の子どもたちの中でも自分の思いを言葉で表せるようになり，自分らしさを出せるようになったアユミさん。それとともに，原学級の子どもたちもアユミさんの得意なことや苦手なことなどを知り，気軽に声をかけてくれるようになりました。アユミさんと笑顔で話している子どもたちの姿が多く見られるようになりました。

共に歩む

原学級との連携は，原学級担任と連絡を取り，原学級の様子をつかむことから始めましょう。これによって，特別支援学級の子どもに必要な情報も得ることができます。

また，特別支援学級と原学級の担任が互いの学級の様子を知り協力すると，互いの学級の子どもがかかわり合う場を設定することができ，子どもたちの成長につながります。

事例16 安定した気持ちで行事に参加することを願って

～原学級担任と情報を共有しながら～

アキオさんは，特別支援学級での学習には自信をもって取り組むことができ，原学級の友だちと一緒に学習したいという意欲が出てきています。特別支援学級担任のタナカ先生は，アキオさんの意欲を大切にして，原学級での学習の機会を増やし，宿泊学習や修学旅行などにも安定した気持ちで参加してほしいと願っています。原学級でスムーズに活動するには，どのような支援が必要なのでしょうか。

●アキオさんに学習予定を伝えるために

アキオさんは算数が得意で，文章題も一人で解くことができます。また，音楽が好きで，歌ったりリコーダーで演奏したりしています。そこで，アキオさんが得意で好きな算数と音楽は，原学級で学習することにしました。

タナカ先生は，アキオさんが安定した気持ちで学習できるよう，次週の学習予定（時間割）をアキオさんに知らせたいと思いました。

＜次週の学習予定をアキオさんに伝えるまでの手順＞

(1)学年会で学習や行事の計画を知る。
・原学級の算数と音楽の学習内容と時間割
・行事と行事に向けての原学級の学習内容や時間割
※学年会に参加できない時は学年会要項で確かめ，不明な点は原学級担任に確認する。
(2)原学級の算数と音楽の授業の内，どの授業にST（サブティチャー）として加わるか決める。
※特に，アキオさんが苦手とする学習内容の時には，STとして加われるよう特別支援学級の時間割を修正する。
(3)アキオさんの次週の学習予定（時間割）を作成する。

● 連絡ノートの活用

シリーズ参考ページ
第３集　44ページ

アキオさんは暑さが苦手で，算数や音楽の授業中でも暑い時には床に寝ころんで休んだり気持ちが不安定になったりすることがあります。原学級の算数・音楽の授業のすべてにタナカ先生がSTとして参加できるわけではありません。そこで，タナカ先生は，アキオさん一人で原学級の授業に行く時には，「連絡ノート」にアキオさんのその日の様子や家庭での様子などを書き原学級担任に渡すようにしました。

○月○日（○）（算数）

特別支援学級担任から
朝から暑いので集中することが難しいようです。暑かったので，「僕はやる気がおきません」と言って，床に寝ていました。今日の図形を描く学習に取り組めるか心配です。授業の途中にアキオさんの様子を確かめに行きます。集中できないようでしたら，アキオさんと一緒に特別支援学級に戻り学習したいと思います。私が行く前にやる気が起きない様子が見えたら「特別支援学級へ行って勉強しましょう」と誘って下さい。

原学級担任から
教室を一度出て行きましたが，水を飲んだら，すぐに戻ってきて授業に取り組みました。タナカ先生が来る少し前に図形を描き始めました。タナカ先生に「三角定規の真ん中を力を入れて押さえる」ことを教えてもらったので，先生がいなくなっても落ち着いて三角定規を使って図形を描いていました。

●行事に安定した気持ちで楽しく参加できたアキオさん

原学級での学習の機会が増えてくるとともに，アキオさんの得意なことや苦手なことを友だちが知り，アキオさんの姿をそのまま受け入れてくれるようになりました。そして，アキオさんも安定して宿泊学習・修学旅行などに参加することができました。

5年：遠足

タナカ先生は，遠足では，次にどこまで歩けばよいかアキオさんが分かるようにしたいと考えました。

そこで，遠足の下見に行った時に，チェックポイント（次にどこまで歩くか，その目標になる建物など）をデジタルカメラで撮影し，カードにしました。

遠足当日は，アキオさんと一緒にカードを見て次のチェックポイントを確認し，チェックポイントに着く度に記念撮影をしました。一緒に歩いた友だちも記念撮影に加わり，アキオさんは全行程を歩き通すことができました。

5年：宿泊学習（登山）

タナカ先生は，登山の時に歩く道のチェックポイントのカードを，遠足の時と同じように作りました。

登山当日は，頂上が見えるため，アキオさんはチェックポイントのカードを見ることなく，歩き続けることができました。頂上では全員で記念撮影。後でタナカ先生が宿泊学習の感想を尋ねると，アキオさんは「一番楽しかったのは登山」と答えてくれました。

6年：修学旅行

パンフレットや写真など事前の情報がたくさんあり，アキオさんは修学旅行でどこに行くのかイメージをもつことができました。そのため，アキオさんは旅行の計画を立てる段階から原学級の活動に参加し，友だちと一緒に係や班を決めることができました。コース別見学の内容を決める時には，自分の意見を友だちに伝える姿が見られました。遊園地でのグループを決める時にも，自分の意見を出し，怖くないアトラクションを好む友だちと同じグループになることができました。

修学旅行には，アキオさんは「友だちと一緒に行動する」というめあてをもって参加しました。駅構内の移動やコース別の見学も落ち着いてでき，友だちと一緒に行動していました。

遊園地でもグループの友だちが「アキオさん。次はこのアトラクションにしよう」などと声をかけてくれ，友だちと一緒にアトラクションを楽しむことができました。

共に歩む

アキオさんの個別の指導計画の長期目標には「大きな集団である原学級で，落ち着いて学習することができるようになる」が据えられています。アキオさんの「みんなと勉強したい」という意欲を大事にし，原学級担任と連携しながら原学級での学習の機会を徐々に増やし，宿泊学習や修学旅行などにも「みんなと一緒」ということを励みとして楽しむことができました。

学年会に参加したり，連絡ノートを活用したりして，アキオさんのその時期，その日の様子をこまめに連絡し合いながら学習を進めていったことがよい結果につながったと思います。

事例17 効果倍増！原学級担任との協同支援

～個別の指導計画作成段階から原学級担任とともに～

個別の指導計画を作成して，その子の学習内容や支援を考えるのですが，どうしても特別支援学級での学習に限られてしまいます。もし，原学級でも同じような学習ができれば，その子の育ちはより確かなものになるように思うのですが…。

●個別の指導計画を原学級担任と一緒に作成しよう

特別支援学級担任と原学級担任が協同で個別の指導計画を考えることにより，教育課題や学習内容，具体的な支援の方法などを明らかにしようと考えました。

〈原学級担任との話し合いの内容〉

○サトルさんの最近の様子から
- ・双方の学級での様子　・サトルさんのよさ
- ・サトルさんと原学級の友だちとの関係
- ・保護者の願い　・サトルさんの課題

○サトルさんの教育課題

○教育課題に向けた具体的な学習活動と支援

●サトルさんの教育課題

自分の気持ちや連絡事項を人に伝えることができるようになる。

●教育課題に向けた具体的な学習活動と支援・例①

～パソコンで作文を書いて発表しよう。～

具体的な学習活動

パソコン（平仮名入力）を使って作文を書き，特別支援学級や原学級で発表する。

※丸数字は支援の順序

特別支援学級

①書く内容を決める際，選択できるよう幾つかの行事の写真を示す。
②選択した「音楽会」のことを振り返って担任と話す。担任はサトルさんの姿からよかったと感じたことを分かりやすく伝える。また，サトルさんが話したことで，作文に書けそうなことをメモする。
⑤すぐにパソコンを使って文章を入力できるよう書式はあらかじめ設定しておく。
⑥パソコン入力を見守り，支援を求められたら対応する。教師に支援を求めずパソコン入力できた時は称賛する。
⑦発表に向けて，作文の音読をするようにする。
⑧特別支援学級の友だちの前で発表したり，友だちの発表を聞いたりし，評価し合う。

原学級

③特別支援学級と同じ内容の作文の単元に入る。
④朝の会で，音楽会の様子をうつしたビデオをサトルさんと一緒に視聴する。
⑨サトルさんにとって過度な負担にならないよう，学級全体の前での発表ではなく，生活グループ（4人）の中でサトルさんも作文を発表する。
⑩生活グループの中で，互いの作文を簡単に評価し合う。

原学級の友だちの感想から

○一生懸命練習している様子が，「あせをかいてやりました」という文から分かりました。
○ゆっくり大きな声で発表ができたと思います。
○挿絵が入れてあっていいし，漢字がたくさん使ってあっていいです。

パソコンの使用は保護者の希望でもありました。サトルさんは，筆記よりもさらに意欲的に取り組みました。

また，原学級での作文発表に向けめあてをもって作文の音読に取り組むことができました。友だちの感想を聞いて，笑顔いっぱいのサトルさんでした。

●教育課題に向けた具体的な学習活動と支援・例②

～朝の会で「一日の予定の発表」をしよう。～

具体的な学習活動（抜粋）

朝の会で「一日の時間割の発表」をする。

※数字は支援の順序を表しています

特別支援学級

①朝の会の「一日の時間割の発表」をサトルさんに任せる。
②発表できたら，大きな拍手をして，「大きな声でゆっくり言えたね。」などと称賛する。
⑥「一日，頑張りましょう。」とサトルさんと一緒に言う。
⑦「一日，頑張りましょう。」が言えるようになったら，次は「今日は，○○が楽しみです。」などと言えるよう担任が楽しみにしていることを尋ねる。
⑧ホワイトボードを用意し，サトルさんが書き込めるようにして，明日の発表の準備ができるようにする。

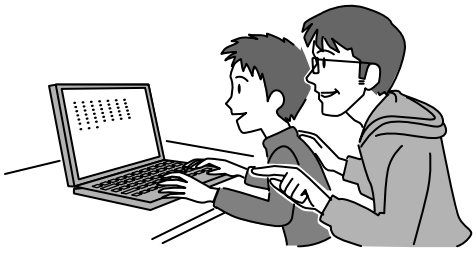
原学級

③朝の会の「一日の時間割の発表」をサトルさんに任せる。
④発表の後には，必ず拍手し，担任は「大きな声でゆっくり言えたね。」などと称賛する。
⑤係が次の日の時間割を黒板に記入する時，サトルさんが担任から明日の予定を聞いて係に伝えるようにする。
⑥「一日，頑張りましょう。」とサトルさんと一緒に言う。
⑦「一日，頑張りましょう。」が言えるようになったら，次は「今日は，○○が楽しみです。」などと言えるよう担任が楽しみにしていることを尋ねる。

サトルさんに「一日の時間割の発表は，自分の仕事だ」といった自覚が芽生え始め，毎日はりきって発表に取り組んでいます。

●家庭からの声（父親の話）

パソコンを通して，文字入力ができるようになったこともうれしいですが，一緒にパソコンを使うことでサトルと接する時間が増え，よかったと思います。今はサトルが大好きな車のことをインターネットで検索しています。



共に歩む

個別の指導計画に書かれた学習内容や支援が，原学級においても実践できれば，その子の成長はより確かなものになります。本事例では，特別支援学級担任と原学級担任で，個別の指導計画作成の段階から話し合う機会をもちました。

保護者から喜びの声が届き，うれしく思いました。

事例18 保護者の思いに共感する大切さ

～保護者への支援を～

特別支援学級担任のオカダ先生はトモコさんへの支援について，保護者の理解を得ていると思っていました。しかし，あるトラブルをきっかけに保護者との間に溝を感じるようになりました。そして，保護者が一番心配していることを，あまり大切に考えていなかったことに気がつきました。これからも保護者と共に子どもを支えていきたいと思うのですが…。

● ある日のこと

トモコさんは気持ちが不安定になると，友だちに乱暴な行為をすることがあり，特別支援学級担任のオカダ先生が制止していました。そのため，トモコさんが原学級の授業に出る時にオカダ先生がついて行ったり，原学級で落ち着かない様子が見られた時はオカダ先生が迎えに行ったりしていました。

しかし，高学年になったトモコさんは落ち着いて生活できるようになり，安心して原学級の授業に送り出せるようになったとオカダ先生は思っていました。そんなある日，トモコさんは，トモコさんが座り込んでいることを心配し声をかけてくれた原学級のノリコさんにけがをさせてしまいました。

トモコさんは続いていた暑さと疲れのせいで機嫌が悪かったのです。

ノリコさんには申し訳ないことをしたと思います。
ノリコさんの家に謝りに行ってきました。
原学級へはいつもオカダ先生が一緒に行くようにしてください。それだけはお願いします。

トモコさんの母親

ノリコさんの母親

ノリコがトモコさんを許すことができる優しい子であることが，とてもうれしい。
でも，けがはさせられたくない。
トモコさんにきちんと指導してください。

ごめんなさい。もうしないよ。（原学級に）行けなくなるの，いやだよ。

トモコさん

ノリコさん

心配して声をかけたら，こんなことになっちゃった。
どうして？
トモコちゃんのこと好きだけど，乱暴されるのは嫌だな。

●トモコさんの母親の話

トモコさんのお母さんは，学校に来て「また周りの子どもたちにけがをさせるのではないかと心配です。」「本当は，特別支援学級でオカダ先生と学習してくれるだけでいいと思っています。」「トモコは，原学級には行かなくてもいいです。」と話してくれました。

そして，トモコさんが原学級の授業に参加していても，原学級の参観には来てもらえなくなりました。

●オカダ先生の思い

オカダ先生

オカダ先生は，トモコさんの母親の立場に立って今回のトラブルについて考えてみました。トモコさんの母親には「子どもが特別支援学級に在籍していることへの複雑な気持ち」「子どもが友だちに乱暴なことをしないかと，ずっと心配している大変さ」「トラブルの度に，相手の子の保護者に謝る辛さ」があるのではないかと想像しました。

そして，トモコさんの母親を支える上で一番大切なことは，原学級のサカモト先生や保護者が「トモコさん，頑張っているね。」などと声をかけてくれることだと気づきました。

● 原学級の担任・子どもたち・保護者への働きかけ

①原学級の子どもたちに，トモコさんが頑張っていること，叩いたり蹴ったりした理由を今以上に伝える。また，原学級の子どもたちの存在が，トモコさんの支えとなっていることも伝える。
②オカダ先生自身がＰＴＡの会議や行事に積極的にかかわり，原学級の保護者と話せるようになり，原学級の保護者とトモコさんの母親をつなぐ役を果たす。
③全保護者を対象とした校長講話の中で，特別支援教育について触れていただく。
④トモコさんの母親のことを心配してくれている原学級の母親に，トモコさんの母親に声をかけてくれるようお願いする。
⑤原学級の保護者懇談会で，担任のサカモト先生にトモコさんのことについて話してもらう。また，オカダ先生自身も出席し，トモコさんの様子や母親の思い，原学級の子どもたちがトモコさんを支えている様子などを伝える。

● その後

・原学級担任のサカモト先生は，トモコさんがこれまで通り原学級で学習できるよう配慮し，子ども同士で助け合うよう指導してくれました。トモコさんは前以上に喜んで原学級での学習に参加しています。
・原学級のある母親が，トモコさんの母親に必ず声をかけてくれるようになりました。
・オカダ先生はこれまで以上に，トモコさんの母親にトモコさんの様子や原学級の友だちとのかかわりを伝えるよう心がけました。トモコさんの母親は，特別支援学級にかかわることには，これまで通り協力してくれ，「原学級での学習をどうするかは，オカダ先生に任せます。」と言ってくれました。しかし，原学級と一緒の行事などには参加しない状態が続いています。オカダ先生は，努力を続けていけば，いつかトモコさんのお母さんが心を開いてくれるのではないかと思っています。

共に歩む

・担任との関係が良好だと思っている家庭でも，あるトラブルをきっかけに，連携がうまくいかなくなることがあります。保護者の思いに立ち返るとともに，今できる支援を改めて考え直すことが必要です。本事例では，原学級の子どもたちや保護者に特別支援学級について理解してもらうことが，特別支援学級の子どもやその保護者を支えることにつながると考え取り組みました。

事例 19

保護者に学ぶ

～お母さんはその子についてのプロフェッショナル～

ヤマダ先生は以前にも特別支援学級の担任をしたことがあります。障害のある子どもへの対応の仕方は分かっているつもりでした。ところが，今度担任したタカシさんは「好きな活動には集中して時間一杯取り組む」というよい点がある反面，よくパニックを起こします。日によって，好きな活動にも取り組めないことがあります。ヤマダ先生は「いったいどんな対応をすれば，タカシさんが安定して学校生活を送ることができるのだろうか」と悩んでいます。

●パニックになったら，どう対応するの？

国語の漢字学習の途中で，筆箱の中を見たタカシさんは，消しゴムがないことに気がつきました。タカシさんは大きな声で叫び泣き出しました。

ヤマダ先生は朝からのタカシさんの行動を思い出し，「図書館で本を借りた時に置いてきたのではないか」と思い，図書館に行ってみました。図書館には消しゴムはありませんでした。

「原学級の算数の授業で使った時に忘れたのかな」とも思い，原学級にも行きました。ありました。特別支援学級に戻り，「タカシさん。あったよ」と消しゴムを渡すとタカシさんは泣きやんで漢字学習の続きを始めました。

タカシさん

ヤマダ先生

消しゴムが見つかってよかった。見つからなかったら，タカシさんに何と言えばいいんだろう。
家でも同じようなことがあるのかな。
お母さんに聞いてみよう！

お母さんの話
ご迷惑をかけました。タカシが今使っているのと同じくらい使った消しゴムを先生に預けます。もし，消しゴムをなくした時は，それを見せながら「ほら，落ちていたよ」と話してください。

数日後，また消しゴムがなくなり，タカシさんが泣き出しました。ヤマダ先生は，その日タカシさんが行った場所を探しましたが，消しゴムは見つかりません。そこで，ヤマダ先生は「ほら，落ちていたよ」といいながらお母さんから預かっていた消しゴムをタカシさんに渡しました。すると，タカシさんは泣きやみました。

ヤマダ先生はタカシさんの生活を見返し，消しゴムの他になくした時にパニックになる可能性のある物は何か考えました。

そして，お母さんに鉛筆・ポケットティッシュ・ハンカチなどを用意してもらい，ヤマダ先生が預かるようにしました。

●学習に取りかかれないけれど，どうしたらいいの？

タカシさんは算数が好きで，計算問題に喜んで取り組みます。ところが，暑さのせいか3日続けて取りかかることができません。問題数を減らしたり，簡単な問題に代えたりしましたが，タカシさんはやる気が起きないようです。

ヤマダ先生

タカシさんは毎日宿題を必ずやってくる。
家ではどうやっているのだろう。
お母さんに聞いてみよう！

お母さんの話
宿題はいつも喜んでやっているわけじゃないですよ。宿題の後に食べるおやつを用意しています。
それでもだめな時には，ポイントシールをあげる約束をします。ポイントがたまると，大好きなゲームができることになっているんですよ。
また，「宿題をやると，サンタさんがプレゼントを持ってきてくれますよ」と話すこともあります。

計算問題を始める前に，ヤマダ先生はタカシさんの大好きな折り紙を見せながら「計算を全部やったら，次に折り紙やろうね」と声をかけてみました。タカシさんは，「次に折り紙」と言いながら計算問題に取りかかることができました。

●特別支援学級内の物の配置を変えたいけれど，大丈夫かな？

タカシさんは物の位置が変わったり，あった物がなくなったりすると，何回も同じことを聞いたり，なくなった物を探したりします。

ヤマダ先生は他の子ども（1年生）のために物を片付けて，教室を使いやすくしようと考えました。「１年生のために教室の中を変えます。タカシさんの机が動きます。いいですか」とタカシさんに話すと，タカシさんは「いいです。」とこたえながらも「嫌だ」という気持ちを仕草で表しました。

ヤマダ先生は「タカシさんに受け入れてもらうには，どう話したらいいのだろう」と困ってしまいました。

ヤマダ先生

お母さんの話
実は家の改築をする時に，私も困ってしまったの。そこで，タカシの好きなゲームとテレビ番組で使われている言葉をまじえてこう言ったの。
「今の家を【ビフォーアフター】することにしたの。今よりも【バージョンアップ】することにしたんだよ。どう？楽しみでしょう」
そうしたら，変わることを受け入れて，変わった後も大丈夫だったんですよ。変える前によく説明をして，【ビフォーアフター】【バージョンアップ】の言葉で期待させてみてください。

ヤマダ先生は早速タカシさんに説明しました。
「タカシさん，１年生のために教室を【ビフォーアフター】することにしました。タカシさんの机の場所は【バージョンアップ】します。楽しみでしょう。」
タカシさんはにっこり笑って「【ビフォーアフター】で【バージョンアップ】！」と言いました。
タカシさんは机を移動した後も落ち着いて勉強に取り組んでいます。

共に歩む

こだわりやパニックへの対応の仕方は，子どもによって微妙に違います。その子がどんな時に頑張れるか，一番よく知っているのは保護者です。その子のことを理解し，愛情を持って育ててこられた保護者に，誠意をもって相談することで，キーワードとなる「ことば」や対応の「ヒント」をたくさんもらうことができます。その子についてのプロフェッショナルである保護者にたくさんのことを教えていただきましょう。

事例 20

校内の連携を大切に

～連絡カードを活用した授業者間の情報交換～

集団の中で生活することが難しい生徒の登下校にはいつも気をつかいます。特に，友だちに会うことをさけるために遅刻する生徒もいます。

ナカムラ先生は，特別支援学級の生徒が登校する前に，通常の学級の授業に行かなくてはならないことがあります。特別支援学級の生徒に朝会うことができず，ゆっくり話を聞いてあげることもできません。ナカムラ先生は，これでは生徒との信頼関係も作りづらいし，継続的な指導もできないと悩んでいます。

昨日も少ししか眠れなかった。
早くふとんに入っても眠れないんだ…。親は「仕方ないよ」って。
ナカムラ先生に話そうと思っても，授業だから行っちゃう。
どうせ僕のことなんか…。

ユウジさん

ユウジさんは，朝，調子がよくないことが多いなあ。何か心配事でもあるのかな。
話を聞いてあげたいけれど，通常の学級の授業に行かなくては…。

特別支援学級担任　ナカムラ先生

もっとうちの子のことをよく見てください。
十分な支援をしてもらえると思って入級したのに…。

ユウジさんの保護者

ユウジさんは登校する時刻がだんだん遅くなり，欠席もするようになってきました…。

このままでは，ユウジさんは登校できなくなってしまうかもしれない。
どうしたらいいだろう。

そこで，校内小委員会（特別支援教育コーディネーター・特別支援学級担任・原学級担任・教科担任）を開き，ユウジさんを支える手だての一つとして「連絡カードの活用」を試みることにしました。

●連絡カードの活用にあたっての確認事項

①朝，特別支援学級担任が生徒の様子を連絡カードに記入し，特別支援学級の1時間目の授業者（教科担任）に渡す。
　※　生徒が登校していない時はその旨を記入し1時間目の授業者に渡す。
②授業者が生徒の登校時刻や授業の様子を連絡カードに記入し，次の授業者に渡す。
③連絡カードへの記入は，２行程度のメモとする。
④連絡カードへの記入だけでなく，立ち話でもいいので口頭で連絡し合う。

●連絡カードは，こんなふうに使っています。

情緒障害特別支援学級　　アツコさん（３年女子）・ユウジさん（２年男子）

登校	アツコさん　7:30 ユウジさん　8:50	下校	アツコさん　ルイさんと下校 ユウジさん　部活へ

○月○日○曜日	時	No.教科等	授業者	学習内容	気づいたこと・申し送り
	朝		ナカムラ（担任）		アツコさん「もう帰りたい」と言っています。話を聞いてあげてください。ユウジさん,まだ登校していません。
	1	2 英語	マキタ	アツコさん:Lesson3 ユウジさん:Lesson3	アツコさん,始めの5分ほど雑談をしました。その後,張り切ってやっていました。ユウジさん8:50に来ました。少し話を聞き授業に入りました。
	2	3 数学	コイケ	アツコさん:代入法 ⟶ ユウジさん:単元テスト→	代入法も加減法もマスターしています。 よく理解できています。文字式の説明が課題。
	3	4 音楽	ワ　ダ	アツコさん:箏 ユウジさん:Best friend	アツコさん,箏のテクニックはだいぶあがってきました。ユウジさん,あまり元気がなかったです。少し家の話を聞きました。
	4	5 作業	ナカムラ（担任）	コラージュ	10組の友だちと一緒の授業でした。作業はあまり進みませんでしたが,友だちと話ができ,二人とも気分転換になったようです。
	昼				

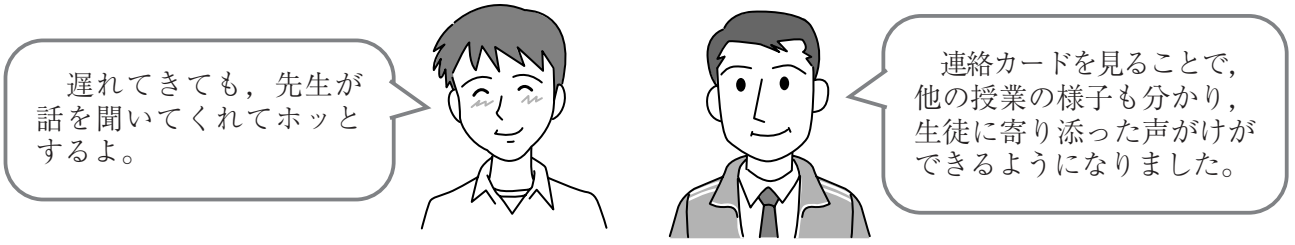
○枠と太字の文字はあらかじめ印刷しておきます。

○朝の『気づいたこと・申し送り』の欄には，特別支援学級担任のナカムラ先生が生徒の朝の様子を記入します。時には，授業者（教科担任）へお願いしたいことを記入することもあります。

○１時間目以降の『No.教科等』，『授業者』，『学習内容』，『気づいたこと・申し送り』の欄は授業者が記入します。

○ナカムラ先生は，休み時間にも連絡カードを見て特別支援学級の生徒の様子を確かめるようにしています。そして，生徒の体調がすぐれない時などには，カナイ教頭先生や養護教諭のコバヤシ先生と連絡を取り，対応しています。

○連絡カードは，生徒のその日の学習の記録となります。ナカムラ先生は，連絡カードをつづり，保護者懇談会の資料や個別の指導計画の見直しの資料として役立てています。



共に歩む

生徒のその日の様子を知って，声をかけることは大切です。連絡カードを活用することで，多くの先生が生徒の様子を知ることができ，その子に寄り添った声がけをすることができます。

また，連絡カードは，職員が連携して生徒を支援する際の資料としても役立ちます。

事例 21

積極的な情報交換

～気楽にミーティングを～

特別支援学級での子どもの生活がうまくいっていない時に，そのことを誰かに相談することは勇気のいることです。また，保護者の願いを大切にしたいと思っても，なかなかよい考えが浮かばないこともあります。

追い詰められたような気持ちになったとき，相談できる相手はいますか？

●「うちの子のことも，もっと考えてください。」

マサヒデさん

ゴロウさん

マサヒデさんが大きな声をあげると，気が散って何もできないんだ。
イイジマ先生もマサヒデさんのところに行っちゃって，僕は何をしたらいいか分からないんだ。

ゴロウさんはだんだん学校を休みがちになりました。
心配したゴロウさんの保護者が学校に相談に来ました。

ゴロウが，学校に行くのを嫌がるようになっています。
他のお子さんに対応しなくてはいけないことは分かりますが，ゴロウにかかわる時間もつくってほしいんです。
うちの子のことも，もっと考えてください。

ゴロウさんの両親

ゴロウさんも落ち着いて学習できるように考えてみます。

イイジマ先生

一人で悩んでいても，いい知恵は浮かばないよ。
みんなで考えてみましょう。

特別支援教育
コーディネーター
ミズノ先生

お父さんやお母さんの言うことはよく分かるし，その通りなんだけど，マサヒデさんが落ち着かなくなると，マサヒデさんについていなければならない。その間，ゴロウさんの支援をどうしたらいいんだろう。
来週もゴロウさんのお父さんとお母さんが学校に来るけど，来週までに何をしたらいいんだろう…。
ミズノ先生，相談にのってください。

イイジマ先生の悩み

●ミーティングを開こう

相談を受けたミズノ先生は，特別支援学級の様子をよく知る職員数名にすぐに声をかけ，翌日の放課後にミーティングを開くことにしました。

テーマ
ゴロウさんがいい表情で取り組んでいた場面を取り上げて，ゴロウさんが安心して学校で過ごせる条件を考えよう。

緊急にミーティングを開く場合には，参加者を少なくして，すみやかに開くことを重視します。
また，ミーティングのテーマを明確にし，１時間程度で終了するようにします。
一度だけではなく，実施日時とテーマを明確にして，繰り返し行うと効果的です 。

自分でやる枚数を決めて数学のプリントをやっている時は，一人で落ち着いて学習を続けていたなあ。

電車の絵の話をすると，家でかいた作品を見せてくれて，とてもうれしそうだった。あの活動を学校でも生かしたいなあ。

自分のやることがはっきりしていたら，たとえ先生がいなくなっても，落ち着いていられそうです。

電車のことを調べたり電車の絵をかいたりすること，パズルを一人の時にやるようにしたらいいと思います。

○「退屈」「何をやったらいいのか分からない時間」がゴロウさんのストレスになっていますね。
○生真面目なゴロウさんには，一人になった時にやることを提案することも大切です。学習だけでなく，楽しみな時間も提案しましょう。
○ マサヒデさんの対応の仕方も，チームで考えていきましょう。

今後の方向決める

○ 一人でも取り組める課題プリントを常に用意しておく。
○ゴロウさんが好きな電車の絵をかく，ジグソーパズルなどができるよう準備し，いつやるか，どこでやるかといったルールをゴロウさんと相談して決める。

●保護者に伝える

翌週ゴロウさんの保護者が再び訪ねてきました。イイジマ先生はミズノ先生と二人で懇談することにしました。

そして，ミーティングで話し合った内容を基に，ゴロウさんの好きな活動を学校でも取り入れ，イイジマ先生が一対一でゴロウさんを支援する時間を取るようにしたいと話しました。

共に歩む

忙しい学校現場では相談する相手も限られ，特別支援学級担任が一人で悩むこともあります。特に学級の中がうまくいかず，そのことで保護者と話をしなければならないときには，追い詰められた気分になってしまうことがあります。

学級のことをよく知る職員で気軽に話し合う機会を持ち，知恵を出し合いましょう。

事例 22

校内支援体制の充実に向けて

～ケース会議で生徒理解を深める～

トオルさんへの特別な教育的支援を校内支援体制の中で考え始めたＳ中学校でしたが，トオルさんの急激な変化や保護者との意見のくいちがい等，事態は一向に良くなりません。そのような中で職員は「トオルさんを理解したい。」と言う気持ちを一層強くもちました。職員研修，外部機関への働きかけ，さらには学校体制の改善，様々な試みの中からトオルさんが少しずつ変わり始めました。

●トオルさんをどう理解したらよいのかわからない職員

個別の指導計画を作成し職員会で支援の方向を検討し，特別支援教育コーディネーターを中心とした校内委員会を設置しました。

学習に消極的なトオルさん

トオルさん

・小学校では本人の気の向いた時間に特別支援学級で学習していた。
・中学校では授業に参加できず，職員室や体育館等で遊ぶ毎日。「勉強は小学校であきらめた。今更やっても仕方ない。」
・空き時間の職員が個別学習をするが,「こんな優しい問題，バカにするのか。」と言い，一方「こんな難しい問題は無理だ。」と何もしない。
・注意すると「命令するのか。」と興奮する。
・「家に帰ってもつまらない。」と毎日登校し，夕方遅くまで帰ろうとしない。

・病院の医師や臨床心理士からトオルさんの障害についての話を聞く。（職員研修の実施）
・地域の養護学校コーディネーターに来校していただき，アドバイスを受ける。

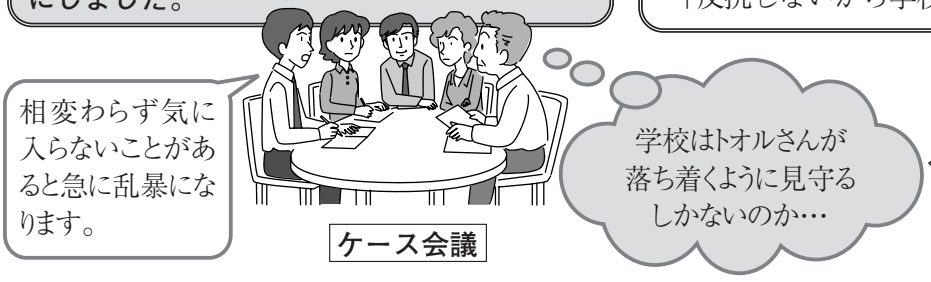
●トオルさんの障害への理解が職員間に共有されてもトオルさんの状態は変わりません

益々まわりを拒絶していくトオルさん

トオルさん

・「学習しても分からない。」
・「分からないのに勉強しろと言われる。できねえおれの気持ちが分かるか。」
・「本当はきれたくないがどうしていいかわからん。おれは何をしたらいいんだ。」
・「反抗しないから学校にいたい。」

まず，学校での支援のあり方を検討することにしました。



・様々な機関や親と共に**「トオルさんの学びの場」づくりの相談・協力が必要**だ。

●「外部機関」との連携を探り始めたが・・・

医師

保護者が積極的に治療を求めないと治療はできません。

外部機関に働きかけながらもう一度,校内体制を見直してみよう。

何かあったら学校に行きます。家庭訪問もします。先生方，一緒に頑張りましょう。

教育委員会

児童相談所，保健所等

もう少し様子を見て対応しましょう。

ケース会議

●「校内体制」で新たな試み

トオルさんの好きなスポーツを一緒にやりながら話を聞きます。

タカダ先生

トオルさんは学校内に自分を受け入れてくれる居場所を求めていたんだ。

でも，タカダ先生だけにまかせておいていいのかな…

ケース会議

適応指導員として加配されたタカダ先生を中心に校内体制を再構築しました。

行動が落ち着き始めたトオルさん

トオルさん

・「タカダ先生バスケットしようぜ。」等と，タカダ先生をスポーツに誘う。
・自らタカダ先生に話しかけるようになり，乱暴に振る舞うことが少なくなる。

●トオルさんの変容で，他の生徒のことも理解しようと動き出す職員

トオルさんのための活動の場，時間に対応できる職員がいることでトオルさんは落ち着いてくるんだ。

トオルさんの行動パターンが予測できると接し方にも余裕が出てきた。

タカダ先生だけでなく，他の職員も取り組んでいるという姿がトオルさんに伝わってきたね。

ケース会議

父親は忘れ物を学校に届けてくれるようになってきた。もう少し，トオルさんの気持ちに寄り添ってもらえるよう学校から働きかけよう。

苦手なことにも取り組み始めたトオルさん

トオルさん

・「自分」を意識して行動しようとすることが多くなる。「僕は暴力はやめるんだ。」
・「タカダ先生，たまには勉強しよう。」「家はつまらない。学校がいい。」

トオルさんのケース会議を通して他の生徒も理解しようと動き出した職員。不登校の生徒に対するケース会議も行われるようになりました。

共に歩む

特別な教育的支援が必要な生徒への対応で，校内支援体制がうまく機能しないと感じている学校は，生徒の変化に応じてケース会議を開いてみましょう。「この子をもう少し理解してみよう。」「校内で可能な支援がまだあるかも。」などと，職員の意見を重ねてアイディアを出し合うことで，校内支援体制は機能するようになってきます。職員の前向きな姿勢は子どもの心にきっと届きます。

事例23 時間いっぱい授業に参加できるように

～スクールカウンセラーの助言を生かした支援～

マサオさんは中学校に入学してから，環境が変わったためか一日の日課の流れがつかめず，パニックを起こすことが多くなりました。また，授業中はノートに絵を描くなど，学習に集中できない状態が続いています。担任としては，具体的な手立てが分からず悩んでいます。

●マサオさんは，いろいろな場面で行動に落ち着きがなく困ったな？

授業が始まっても，集中できないようです。（教科担任）

行動に落ち着きがなく困ったな…
棚の中に隠れるということもあるし…

休み時間に虫取りに夢中だけど次の授業に間に合うのかな？（友だち）

特別支援学級のミズノ先生はサトウ先生に相談しました

授業が始まっても廊下にいることがありますよ。（養護教諭）

＜スクールカウンセラー・サトウ先生からのことば＞

授業参観をして，マサオさんへのかかわり方を一緒に考えましょう。まず，マサオさんの話を聞きたいと思います。

●スクールカウンセラー・サトウ先生からの助言

＜助言１＞
授業はスモールステップで行い，短い時間の中で集中できるようにしたらどうでしょうか。短い休憩時間を入れて目標をもてるようにしましょう。

＜助言2＞
視覚を通して，一日の日課を分かりやすく掲示をしましょう。日課の変更があるときは，早めにマサオさんに伝えましょう。

＜助言3＞
落ち着きのない時には，じっくりとマサオさんの話を聞きましょう。できるだけ，マンツーマンの時間をとりましょう。

サトウ先生の助言をもとにミズノ先生は，教科担任者会でマサオさんへの支援を考えました。

●授業中，学習に集中できないマサオさんへの支援

○１時間通しての授業は，なかなか集中できないマサオさんに，ドリル学習を採りいれて，１５分学習したら５分間休憩時間をとり，後半の学習を行うようにしました。慣れてきたら少しずつ時間を延ばしていくようにしました。
　教科担任へも，マサオさんに対して同じような支援をお願いしました。
○視覚的に興味がわくような板書の工夫をしました。
　（文字を大きくしたり・項目ごとにチョークの色を変えたりするなど）

＜変容：学習に向かう姿勢が改善されてきたマサオさん＞

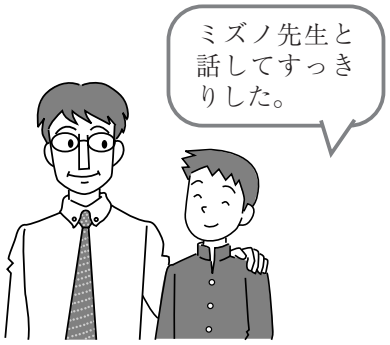
・初めは時間が気になり「あと何分で休憩」と尋ねていたマサオさんでしたが，目標をもって１５分間程は集中して学習できるようになりました。
・ノートのまとめ方も自分で工夫して，板書のとおりに色を変えて，まとめるなど学習も興味をもち，楽しく行えるようになってきました。

●授業が始まっても虫取りしていたり，教室に入らなかったりするマサオさんへの支援

○予定黒板に次の日の予定を書くのを，マサオさんの分担にしました。
（明日の教科のスライド・給食や清掃の時間・下校時刻・持ち物など）

＜変容：日課が分かり安心して一日を過ごせるようになってきました＞

・毎日継続して予定を板書することで，その日の日課に見通しをもつことができ，パニックを起こしたり，授業に遅れたりすることがなくなってきました。



●落ち着かないと棚の中に隠れてしまうマサオさんへの支援

○授業のスライドの中に，マサオさんとのマンツーマンの時間があります。授業の始めの２０分間をマサオさんの悩み相談・興味関心のあることなどをじっくり聞く時間をとりました。

＜変容：マサオさんからミズノ先生に話かけるようになってきました＞

・初めは，ミズノ先生からマサオさんに質問をして会話をすることが多かったのですが，そのうちに，マサオさんからミズノ先生へ話かけるようになってきました。マサオさんの悩みや興味のあることが分かり，だんだんと楽しい会話が続くようになってきました。

● 3 年になったマサオさんとミズノ先生

１年生の頃は， 授業が始まっても， 学習になかなか集中できなかったり，その日の予定が急に変更になると教室移動できなかったりしたマサオさん。３年生になった現在，５０分授業の時間いっぱい取り組むことができるようになってきました。スクールカウンセラーのサトウ先生の助言をもとに，ミズノ先生は，授業での時間の使い方や，適切な課題のもち方を試行錯誤しながら支援を継続してきました。そして，教科担任の先生方にも同じような支援のしかたをお願いしてきたので，マサオさんは前向きな姿勢で授業を受けられるようになってきました。

共に歩む

スクールカウンセラーの先生から助言いただいたことで，担任がマサオさんへの支援の方向を理解することができました。担任一人で抱え込まず，相談者を求めたことが大変有効であったと思います。助言されたことをそのまま受け入れるのではなく，学校のどの場面でどのように生かしていけるのかを，探っていきましょう。教科担任とも情報を交換して，継続した支援となるようにすることが大切です。

事例24 連携で得た情報を学校生活へ

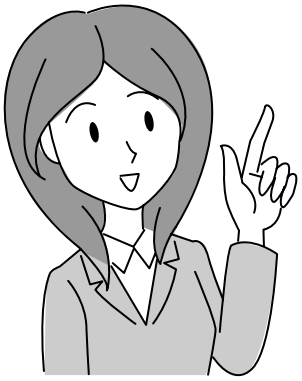
～保護者，医療，福祉機関の方との連携～

４月になって環境が変わり，イチロウさんは，気持ちが不安定になると激しく泣き続けたり，周りにいる先生や友だちに突然つかみかかったりします。イチロウさんが安定した生活を送れるようにするにはどのように支援したらよいか，特別支援学級のナガシマ先生は一人で悩んでいる毎日です。保護者もイチロウさんの最近の様子を心配しています。こんなときは，どうしたらよいのでしょうか？

ナガシマ先生は，イチロウさんが不安定になる状況を「何とかしなくては」と思いながらも，よい支援の方法が見つからず一人で悩んでいます。

●特別支援教育コーディネーターの先生と協力して（情報交換を積極的に）

ナガシマ先生の姿を見て,特別支援教育コーディネーターの先生が心配して声をかけてくれました。そして，イチロウさんの教室での様子や自分が困っていることなど相談する中で，今までの支援の状況を整理し支援の方向を考えてみてはどうかとアドバイスをもらいました。



・イチロウさんを以前からよく知っている人や現在かかわりのある人と情報交換をしてみましょう。
・イチロウさんへの今までの支援の状況を「個別の教育支援計画」のネットワークを活用してみてはどうでしょう。

外部機関との連携
シリーズ参考ページ
第３集　４８ページ
個別の教育支援計画
シリーズ参考ページ
第３集　７０ページ

●イチロウさんへのよりよい支援に向け，みんなでアイディアを出し合って

特別支援教育コーディネーターの先生に窓口になってもらい，関係機関に出かけたり，学校に来ていただいたりして，イチロウさんの生活にかかわりのある方と支援の方向について，情報交換や意見交換をしました。

タカダさん（○○病院）
・現在行っている作業療法の内容やその意味
・絵，写真カードを利用したコミュニケーション支援
・気持ちが不安定になった時の対応

シライさん（相談療育センター）
・写真や絵カードを利用した見通しのもちやすい生活
・気持ちが不安定になった時の対応
・家庭での余暇の過ごし方

ナガシマ先生（学校）
・見通しのもちやすい時間割や日課の工夫
・写真や絵カードなど視覚的な情報を利用した支援
・作業療法の内容も参考にした学習
・気持ちが不安定になった時の対応

保護者（家庭）
・規則正しい生活リズム
・余暇の過ごし方の工夫
・気持ちが不安定になった時の対応

ナガシマ先生は困っていることで頭がいっぱいになっていましたが，連携する中でイチロウさんの伸びてきているところや頑張っていることなど，違った角度からイチロウさんのことを考えることができ，とても参考になりました。

●いただいた情報をイチロウさんの学校生活に生かして

過剰な刺激を少なくするようにして

○人につかみかかるなどの不適切な行為がコミュニケーションの手段とならないように，周囲の先生は過剰に反応しないということを全職員で確認しました。
○気持ちが不安定な時は,むやみに声をかけることをせず，静かで刺激の少ない場所（会議室,視聴覚室）に移動し，見守るようにしました。長い時でも30分ぐらいのうちには気持ちが落ち着くようになりました。
○狭い場所に子どもたちが大勢いるような状況は，気持ちが不安定になりやすいので避けるようにしました。

活動の終わりが目で見て分かるようにして

イチロウさんは，好きな活動をやめなければならない時や授業の途中で不安定になってしまうことがあります。それは，「どこで活動が終わりになるのか」が，分からないからではないかと考えました。

○１時間に学習する量の教材を最初に見えるように示し，無くなれば終わりとする。
○教科書や本を使用するときは,終わりのページに「おわり」と書いたカードをつける。
○「時間の終わり」については,イチロウさんは，時計を見て終わりを理解することは難しかったので，好きな遊びをやめる時などは,「タイムタイマー」を使い「赤い色の部分が無くなったら終わり」とし，同時に「おわり」と書いたカードを示すようにする。

一日の予定を絵カードで示すようにして

○一日の日程を,授業の時間割だけでなく,「着替え」「給食」「はみがき」などの活動も含めて絵カードを掲示するようにする。

↓

○毎朝イチロウさんと一緒にカードを指差しながら予定を確認するようにした。しかし，一つの活動が終わった後,次の活動へ自ら取り組むという姿になかなかつながらない。

↓

○掲示されたカードのどこを見ればよいかが分からないのではないか？

↓

○活動が終わったカードを取り外すようにして，次の活動のカードが示されるようにする。

共に歩む

子どもへの支援で困った時，学校生活の場面だけをとり上げて一人で考えるのではなく，その子にかかわっている保護者，地域の支援者、医療関係者などとのつながりを活用することが大切です。他の支援者と連携し，情報交換をすることによって，いろいろな角度からその子の姿を理解し合い，よりよい支援の方向を一緒に考えます。

そして，現在の学校生活でその子の実態に合わせて，支援の方法を工夫することが大切になります。話し合ったことが、そのまま生かされないケースもありますが、学校での子どもの姿をよく知る私たちが、試行錯誤しながらチャレンジしていくことが大切と考えます。

事例 25

効果的な医療との連携

学校での記録をもとに医療機関と支援について考えていった事例

情緒障害特別支援学級（以下情障学級）に入級してきたヤスシさん（小2）は，自分の好きなことをしている時間は集中しているけれど，それ以外の時間は，なかなか落ち着いて学習に取り組むことができません。このようなヤスシさんをどう理解し，ヤスシさんが学習に集中できるようにするためには，どうすればよいのでしょうか。

●４月，ヤスシさんが情障学級に入級してきました。

・好きな絵を描いている時間は，集中しています。
・みんなと一緒に何かやろうとしても，なかなか集団の輪の中に入ろうとしません。声を上げながら歩き回っていることがよくあります。また，一人で教室から出て行ってしまうこともよくあります。
・視線が定まらず，にこにこしながら首を動かしていることがよくあります。そんなときには，話しかけてもなかなかこちらへ気持ちを向けてくれません。

このような障害がある子どもに初めて出会ったタケダ先生は，どうしていいかわからず悩みました。

シリーズ参考ページ
第１集　１４ページ

●５月，Ａ病院小児科で受診

ヤスシさんの学校生活を心配した保護者は，スクールカウンセラーに相談したところ小児科への受診を勧められました。受診のとき，タケダ先生は学校での記録を医師に届けてもらいました。

プライバシー保護の立場から，学校での記録を外部へ出すことについては，事前に保護者や学校長の承諾を得ることが必要です。
ヤスシさんの場合は，保護者に学校での様子を参観していただき，保護者と担任が共に「ヤスシさんが，落ち着いて生活できるための支援を考えていきたい。」と同じ気持ちになれました。そこで，医療機関への資料提供の了承を得ました。

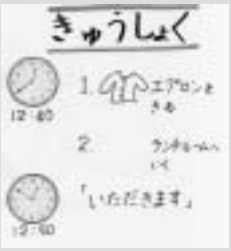
タケダ先生の記録

・給食の時間，みんなと一緒にランチルームへ行くことができず，他の子どもたちが食べ始めた頃にようやくランチルームへ入ってくることが多いです。
・歌は好きなのですが，音楽の時間，なかなか音楽室へ行くことができません。
・音楽集会の時，ステージに上がり歩き回っていたので，席につくよう促すと，興奮して声を出していました。

医師からのコメント

・ランチルームや全校集会などは，**騒がしい感じがいやで中に入れない**のではないでしょうか？
・スムーズに移動ができないときには，**次の行動を示すカードを作って指示**してみてはどうでしょう。
・**一日の流れを表にして記録をしてみる**と，後で分析がしやすくなると思います。
・**行動を落ち着かせる薬が必要**だと思いますので処方します。服薬してみての様子をまた教えてください。

●医師のコメントから，タケダ先生が考えたことは・・・



ランチルームへなかなか入れないのは，**騒がしさがいやなんだ**と考え，最も騒がしい配膳のときは，ランチルームへ入らなくてもいいことにしました。
それから，4時間目が終わってからランチルームへスムーズに移動できるように左のようなカードを作って示しながら声を掛けるようにしてみました。こうすることで，以前よりもランチルームに行って食べ始める時間が早くなってきました。**～耳から入る指示に加えて，目で見てわかるカードがヤスシさんには分かりやすいんだな。～**

●7月に受診する時，表にまとめた記録を保護者に届けてもらいました。

タケダ先生の記録

日時	校時	教科･その他	ヤスシさんの様子･教師の対応
○月12日（月）	1	音楽（原学級）	行きたがらないので,今日は肩ぐるまで音楽室まで連れて行く。着席を促すと,ちゃんとすわって学習を始めた。授業後,音楽の先生から「教師の指示を聞けるようになった」と言われた。
	1	体育（原学級）	みんなの中に入ってドッジボールをする。外野で当てたり,内野で当てられたりするが,怒ったりせず進んで楽しんでいる姿が見られた。4月以来初めてだった。
○月14日（水）	朝	･朝の会（「じゃんけんれっしゃ」）	「じゃんけんれっしゃ」では,勝てなくて面白くなかったらしく,「じゃんけんれっしゃなんかやりたくない。」とわざと聞こえるように言ったが,こちらは聞き流すように対応していた。これでよかったのだろうか･･･。
○月16日（金）	1	国語	用意してあった国語のプリントを書いていた。早くできて持ってくるが,間違っていたところのやり直すよう指示したところ,涙目になっていた。もう少し易しいレベルのプリントで自信をもつようにした方がよいのかもしれない･･･。

医師からのコメント

薬を飲むことで落ち着くようですので，このまま続けて服用するのがよいですね。

- **信頼し，甘え，受け入れてもらえる体験が，情緒の安定の土台**を作ります。だから，受け入れていただけた後は，安定して，怒らずにいられるのですね。
- **ネガティブな発言は聞き流すように対応する**のがよいと思います。
- 失敗したことを繰り返すのは，自尊心を砕くことになります。これまで強い自信をもたずにきた子どもさんは，不安定でもろい自信の上に立っていますので，成功する体験を多く積ませていただきたいのです。本人の力より，少し易しい課題を用意し，**「よくできた」という体験を多くさせて**ください。

●医師のコメントから，タケダ先生が考えたりやってみたりしたことは・・・

1．ヤスシさんの力で十分できる課題を用意しよう。

新しい漢字を覚える学習をするときには，ヤスシさんと相談して量を決め，２～３文字ずつにしました。

2．ネガティブな発言は聞き流すように対応しよう。

ネガティブな発言は聞き流すように対応することで，強く指導することを減らすことができました。また，ヤスシさんがよい行動に向きかけたときをとらえほめるように心がけました。

3．機会を作って，できるだけ一緒に遊ぶようにしてみよう。

一緒に遊んでいると，とてもいい表情を見せてくれました。先生と一緒に遊びたくて，ヤスシさんの方からかかわってくることも増えてきました。人間関係を築いていく上で，まだまだ遊ぶことが必要なんだと思いました。

●タケダ先生の思い～ヤスシさんとの１年間を振り返って～

何とかヤスシさんが安定した学校生活を送るための糸口を見つけたい・・・という思いでとにかく記録をとっていこうと思いました。教卓の上に記録ノートだけは出しておいて，「こんなことがあって困った。」「あれ？いつもと違うな。」と思った時に，忘れないうちに書き留めました。授業が終わってすぐに，それができない時には，放課後にとにかく1～2行でも書くことにしました。

その記録を保護者の了承を得て，医師に読んでもらいアドバイスいただいたことを元に，ヤスシさんへの接し方，支援の方向を，自分なりに考え直すことができました。

また，薬を飲むことにより，ヤスシさんが落ち着いていられる時間が増え，安定した学校生活を送るための素地ができてきました。そのことにより，活動に集中できる時間が増え，ヤスシさん自身が，自信をもって取り組むことのできる活動が少しずつ増えていきました。

共に歩む

情緒的に不安定な状態が続き，学校での活動がうまくいかない時，医療との連携を考える必要があります。このケースでは，スクールカウンセラーの助言により，医療機関へ受診することになり，服薬することで，安定した学校生活を送るための素地ができてきました。

また，医師からのコメントをかみ砕き，いかにその子の学校生活の中に生かしていくか検討し，実行していくことが教師としての大切な役割です。

家庭や医療機関と連携していく上で，基本となるのが日々の記録です。毎日，わずかな時間でも，忘れずに記録をとることで，その子の特徴やよさを見直すこともできます。

事例26 子どもへの理解を深めながら行う進路選択

～ 外部機関の利用や体験入学を通して ～

特別支援学級に在籍しているエミコさん。保護者は，エミコさんの障害を受容できずに，中学３年生になっても将来の進路の方向が定まらないでいました。エミコさんは不安定になり授業に集中できない状態が続いています。ミツイ先生は，生徒の実態を保護者にどのように理解してもらえばよいか悩んでいます。

●卒業後の進路，父親とエミコさんの希望にずれがありミツイ先生は困っています

父親は高校進学，エミコさんは養護学校高等部進学を希望

＜母親の悩み＞
私は,エミコさんの希望を尊重したいのですが,お父さんに気を遣いどうしたらよいか悩んでいます。

懇談

＜ミツイ先生＞
エミコさんは,授業中に「ボー」としていることが多くなってきました。私も心配なので,校内の先生方にも相談してみます。

校内委員会を開き，養護教諭から外部相談機関を紹介されました。

●担任は，保健所や病院などに相談することをすすめました

＜母親＞
エミコは､これからどんな進路を考えたらよいか心配です。

＜父親＞
エミコに障害があることが分かりましたが，どのような進路をとったらよいかを先生と相談をしたいです。高校へは，行かせたいと思っています。

＜エミコさん＞
病院の先生にお話を聞いてもらってよかった。これからの進路，どうしたらよいかな？

懇　談

＜ミツイ先生＞
お父さんも一緒に保健所や病院に行っていただいたことは，大変有意義なことです。これから高校見学や養護学校体験入学もありますので，お父さんも是非参加して，その学校の授業内容や，その学校でのエミコさんの活動の様子を見てください。

保健所と医療機関を受診して

保護者と話をして，保健所でカウンセリングを受けることにしました。カウンセリングをした後，Ａ病院を紹介され保護者とエミコさんは受診をしました。いろいろな検査を行い，エミコさんには発達に障害があることが，保護者に伝えられました。父親はそれまで障害について深く理解をしていませんでしたが，初めてエミコさんに障害があることがわかりました。それでも，高校へ進学をさせたいという父親の気持ちに変わりはありませんでした。

●B高校見学とC養護学校高等部の体験入学をしました

＜母親＞
高校の勉強は,エミコがついていけるか心配です。養護学校は,作業学習など,楽しそうに活動していました。
養護学校なら,本人も活動していけそうかな?

＜父親＞
両方の学校を見学しました，まだ迷っています。将来のことを考えて，どうしたらよいかを，家族で話し合いたいと思います。

＜エミコさん＞
私は高校の勉強では，内容が難しくて，プレッシャーかな…
やっぱり，養護学校へ行きたいです。

懇　談

＜ミツイ先生＞
２つの学校で体験入学を行いました。エミコさんの活動の様子を参観した感想は，いかがですか？エミコさんの将来のことを考えて，家族で話し合ってください。エミコさんは，お家の方に自分の進路の希望や，自分の気持ちを伝えてください。１１月中に，もう一度懇談会を行い，進路の方向を具体的にしていきましょう。

●進路が決まり，明るさを取り戻したエミコさん

＜母親＞
両方の学校を見学しましたがエミコの希望通り養護学校へ行く方向で考えたいと思います。
お父さんの気持ちも変わり，エミコも喜んでいます。
これで,やっとわたしも安心しました。

＜父親＞
病院のカウンセリングや学校見学をして，学校の様子も分かりました。ミツイ先生のお話を元に家族でエミコと話し合いましたが，将来のことや本人の気持ちを第一に考えて，養護学校への進学をお願いします。

＜エミコさん＞
養護学校は，先輩もいるので，心強いな。お父さんも賛成してくれてよかった。

懇　談

＜ミツイ先生＞
エミコさんの，進路の方向が決まってよかったです。エミコさんは，これからC養護学校へ進むための学習の準備をしていきましょう。お家の方も，エミコさんを励ましていってください。

共に歩む

進路に関して，保護者と子ども，学校の意見がなかなか折り合わないことがあります。その場合，保護者が子どもの障害を受け入れることができずにいることが原因になっていることもあります。

このケースでは，校内委員会や担任からのアドバイスで外部相談機関を受診し，障害について保護者の理解を得ることができました。また，複数の学校で体験学習を行い，入学後の生活をイメージしながら学校を選択しました。保護者も本人も納得して学校を選ぶことができました。

保護者と学校と子どもの状態について共通理解し，子どもの将来を見据えた上で，本人の希望と重ね合わせて，進路を選択していくことが大切です。

事例27 小学校と中学校をつなぐ交流会

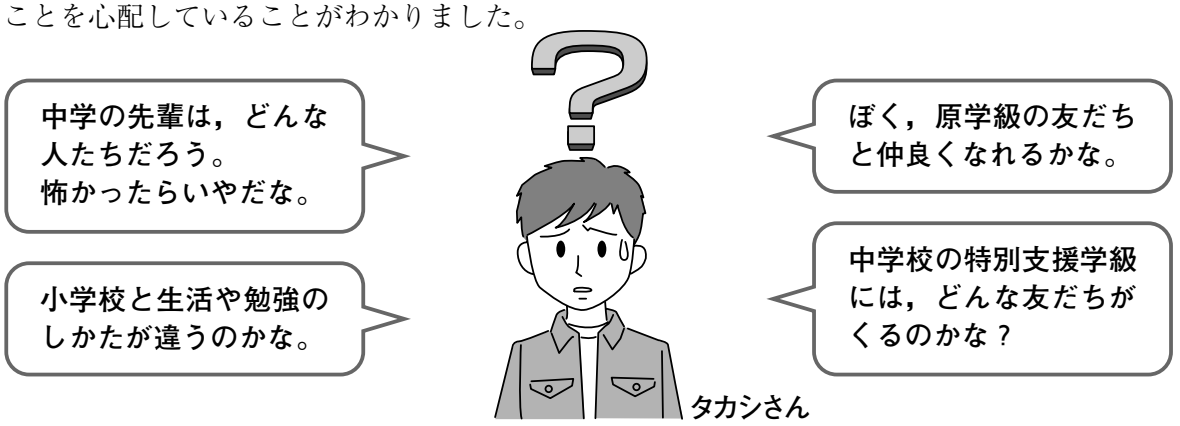
～安心して中学校に進学するために～

特別支援学級に在籍する児童の中には，中学校に進学することに強い不安を訴えることがあります。場合によっては，中学校入学後に不登校などの二次的な障害を招いてしまうこともあります。
これは，安心して中学校に進学するために，交流会や体験入学などを活用した事例です。

●中学校進学に向けて，タカシさんの悩み

タカシさんは，小学校の特別支援学級に在籍している６年生です。小学校では，休み時間になると原学級の友だちが特別支援学級に遊びにやってくるなど交流が盛んです。原学級の学級担任や友だちとの関係もとても良好です。

ある日，タカシさんは，特別支援学級担任のサトウ先生に中学校に進学することへの不安を訴えました。サトウ先生は，タカシさんの不安の原因を一緒に探っていきました。すると，タカシさんは，次のことを心配していることがわかりました。



●中学校区の特別支援学級担任者会で相談

タカシさんが進学する中学校は，３つの小学校から生徒が集まってきます。

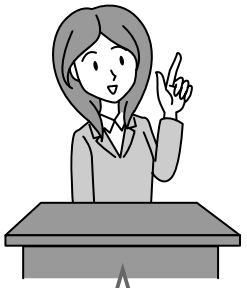
サトウ先生は，関係する学校の先生方に，タカシさんの悩みなどを相談してみました。すると，他の小学校の先生方から，タカシさんのように中学校進学に対して不安を感じている児童や保護者がたくさんいるということが分かりました。

通常の学級に在籍する生徒が中学校に進学して混乱することなく過ごせるためには，特別支援教育コーディネーターを中心とした小中学校間の連携などが必要です。
そのための方法については，シリーズ
第3集　52ページ～53ページ
68ページ～69ページなどを
ご覧ください。

サトウ先生たちは，このような児童や保護者の不安を解消し安心して中学校に進学ができるように，中学校と中学校区の小学校の特別支援学級が１年間を通して交流会や特別支援学級への体験入学，担任による授業見学，保護者見学会などをおこなう計画をたてました。

●特別支援学級　小中連携にかかわる１年間の活動

月	内　　容	会　場
4	自己紹介をしよう。〔交流会〕	中学校
5		
6	カレーを作ってみよう。〔交流会〕	A小学校
7		
8	一日キャンプに出かけよう。〔交流会･社会見学〕	キャンプ場
9	中学校の文化祭を見学しよう。〔学校見学〕	中学校
10	中学校見学会　中学の授業を見てみよう。〔保護者参観〕	中学校
11	体験入学会①　生活単元学習に参加しよう。	中学校
12	クリスマス会をしよう。〔交流会〕	B小学校
1	体験入学会②　教科学習に参加しよう。	中学校
2	お別れ会をしよう。〔交流会〕	C小学校
3	特別支援学級担任者連絡会〔反省と来年度の計画〕	中学校



会場校の校長先生や教頭先生，養護教諭，生徒指導の先生も交流会を見に来て欲しいですね。

交流会のポイント１　会場校は持ち回りにしました。

交流会の会場校は持ちまわりにしました。これは，友だちがどのような環境で生活しているのかをお互いに理解しあうためにも大切です。

交流会のポイント２　交流会は，中学生，小学生混合のグループをつくる

児童生徒にとっては，楽しい一日になると同時に，友だちに慣れるということからも混合グループにしました。最初は緊張もありますが，やさしい中学生の先輩を知り，安心して交流会に参加できるようになります。集団参加が苦手な児童生徒には，一人になれる場面や場所も必要です。

交流会のポイント３　多くの先生方に参加してもらいましょう。顔合わせをしましょう。

特に中学校では，来年または今後入学してくる生徒の実態を多くの職員に理解してもらうためにも，先生方を交流会に招待しましょう。校長先生や教頭先生が児童の実態を知っているということは，中学校進学後の支援体制作りなどに有効です。また，進学してくる児童にとっても中学校の職員の顔を知っているということは安心にもつながります。

体験入学のポイント　体験入学は「楽しい」という気持ちを大切に。

体験入学では，説明だけでなく，実際に授業に参加してもらいました。特に教科学習への参加では，あらかじめ小学校の担任と相談して，解きやすい問題を用意して，「中学の授業も楽しい」という印象を持ち帰ることができるように配慮します。体験入学の感想でも「よかった。安心した」というコメントが多く寄せられます。

●入学後の姿から

中学校では，交流会でタカシさんの様子を見た先生方の意見を取り入れながら，原学級の学級編制をして，タカシさんを迎えました。タカシさんは，交流会で馴染みのある先輩たちや校舎に対して大きな抵抗感もなく中学校生活のスタートをスムーズに切り，溶け込むことができました。

共に歩む

中学校に進学する児童は,見知らぬ世界にたくさんの不安を抱えています。交流会を通して,友だちのことや学校のことを知り,中学校入学に備えていくことができます。そして,児童生徒だけでなく職員同士も交流が深まり互いに相談ができるようになると,入学後にトラブルが起きた場合も小学校の担任から情報や対応策を受け取りながら対応ができます。その結果,不登校などの二次的な障害を予防することにもなり,生徒にとって学校が楽しい場所へとつながっていきます。

そして,小中学校が一緒になって活動を長く続けていくコツは,簡単にできることを毎回積み重ねていくことだと思います。